

ヴァイキングとアングロ・サクソンイングランド再考

デーンロウ (Danelaw) 地帯をめぐって⁽¹⁾・レプトン・ヴァイキング (Repton Vikings) の遺跡

原 征 明

1 は し が き

かつて私は、いわゆる“レプトン・ヴァイキング”(Repton Vikings) についていささか言及する機会をもったが⁽¹⁾、その執筆後に当該遺跡を直接訪れる機会があった。またその際に、遺跡発掘当時の出土品や写真などがいまも展示されているダービー市の博物館に立ち寄る機会をもったので、以下ではそのときの記録などをもとに改めて若干の考察を重ねておくことが本稿の目的である。

ロンドンから目指すレプトン (Repton) 村とそこにある遺跡へ行くには、セント・パンクラス駅 (St. Pancras) から特急で約2時間のダービー (Derby) 駅に向かい、そこで支線に乗り換えて20分ほどのウィリングトン (Willington) 駅で降車するのである。ロード・マップでは、目的地がそこから直線距離で約2~3kmほど南下したところなのであるが、列車を降りてみて、実はウィリングトンがタクシーさえもひろえない無人駅であることにはじめて気がついた。その場で困惑していた私に、偶然通りかかった同世代の見知らぬ男性が親切に声をかけて下さった。Tony Whittaker 氏である。この町では、おそらく東洋人など見かけることなど無かったからでもあろうが、用件を述べると、タクシーならダービー市から呼ぶしか方法はない。ただし午前中なら余裕があるから私が連れて行ってやる、とありがたい助け舟を出してくれた。彼は当地ウィリングトンで「地方紙」を発行するかたわらウェブ・サイト“SOON”⁽²⁾を運営している方である。最初は徒歩でもレプトン行きをと半ば覚悟をきめていたので、彼の助力なしには当初の目的を首尾よく達成することはできなかつたであろうと今でも有難く思っている。彼からはその後翌年もお世話をいただくことになった。ここに記して感謝する次第である。

2 レプトン・ヴァイキング期のマーシャ王国

ウィリングトンからレプトン村に向かうにはトレント川 (R. Trent) を渡らなければならない。現在この川には1839年に開設されたウィリング橋 (Willing Bridge) がかかっている、そこから少し先方に目立った高い尖塔をもつレプトン教会 (= St. Wystan's church) が対岸に現れる。(Fig.1 参照) 前述のトレント川を渡りレプトン村に入ると、道のすぐ左手に立つ看板が目に入っ

(1) 拙稿、研究ノート「ヴァイキングとアングロ・サクソンイングランド再考 デーンロウ (Danelaw) 地帯をめぐって(1)」(「東北学院大学論集」経済学第158号、2005年3月)所収、391-408頁。

(2) office@soon.org.uk magazine www.soon.org.uk guide www.web-evangelism.com

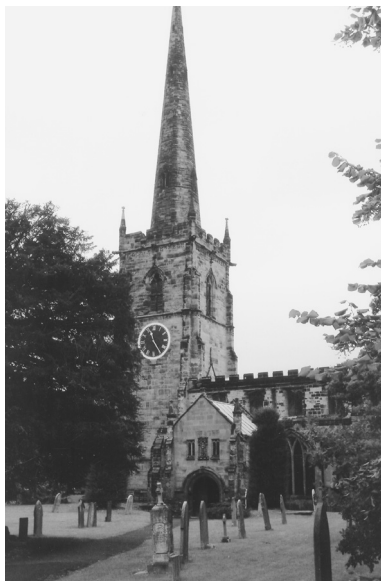


Fig.1 St. Wystan's church
(筆者撮影)



Fig.2 land-mark at Repton Village
(筆者撮影)

てくる。それは、この場所レプトンがその昔アングロ・サクソン期七王国時代にマーシャ王国 (Kingdom of Mercia) にとっての拠点のひとつであったということを示しているわけである。(Fig.2 参照)

もちろんこのことは、当地レプトンが最初からマーシャ王国の恒久的な首都であったということの意味するものではない。一時期マーシャの支配者たちの王宮が置かれたところ (The Royal House of Mercia) なのであった。後述するように、レプトン教会があるこの場所が王国の支配者たちの「埋葬地」となっていた、ということなのである。レプトン (Repton) と記されるこの地は、文献上 *Hrypadun*, *Rapandon*, *Reppindon*, *Reppington* 等々、これまで多様な呼称で記録されているが、それは6-7世紀頃から旧トレント (Old Trent) 川 (Fig.3 参照) の砂礫質河岸に定着した Hrype なる親族集団のアングロ・サクソン人定住を表す ⁽⁴⁾*-ingas* 地名に由来したものと思われる。

(3) Mercia (Old English *Mierce* - "border people") was one of the kingdoms of the Anglo-Saxon heptarchy, centred on the valley of the River Trent and its tributaries in what is now the Midlands of England. . . . The earliest known king of Mercia was named Creoda, said to have been the great-grandson of Icel. He came to power about 585 and was succeeded by his son Pybba in 593. Cearl, a kinsman of Creoda, followed Pybba in 606; in 615, Cearl gave his daughter Cwenburga in marriage to Edwin, king of Deira whom he had sheltered while he was an exiled prince. The next Mercian king was ruled from about 626 or 633 until 655. Some of what is known about Penda comes through the hostile account of Bede, who disliked him both for being an enemy king to Bede's own Northumbria, but also for being a pagan. However, Bede admits that it was Penda who freely allowed Christian missionaries from Lindisfarne into Mercia, and did not restrain them from preaching. After reign of successful battles against all opponents, Penda was defeated and killed at the Battle of Winwaed by the Northumbrian king Oswiu in 655. . . . (from Wikipedia, the free encyclopedia)

(4) *-ingas* 地名とは、アングロ・サクソン・イングランドにおける最早期の地名ではなく、むしろ6世紀に始まる彼らの第2次的植民・定住の段階に属する地名形態である。*-ingas* については、cf. J.M. Dodgson, "The Significance of the Distribution of the English Place-Names in *-ingas*, *-inga* - in South-east England", *Medieval Archaeology*, vol.X, 1966. および拙稿、J.M. ドジソン「南東部イングランドにおける *-ingas*, *-inga* 地名分布の意味」に関するノート アングロ・サクソン人初期定住との関連で、『東北学院大学論集：経済学・第66号所収を参照。

ところで、マーシャ王国 (Mercia, Merciorumu Regum) は7世紀のペンダ王 (625-655) の頃からその勢力を蓄え、8世紀にエゼルバルド王 (Æthelbald 716-757) とオッフア王 (Offa, 757-796) の時代になって隆盛を極めた。これには脚注 (3) にあるように、ペンダ王 (Penda) 以来、リンディスファーン (Lindisfarne) からこのマーシャ王国が早くからキリスト教使節による伝道を容認したという宗教的要因が関わっていたようである。



Fig.3 Old Trent river
(筆者撮影)

『アングロ・サクソン年代記』 (The Anglo-Saxon Chronicle) ではオッフア王をブレドワルダに列してはいないが、かれは自他ともに認める霸王で、チャールズ (= カール) 大帝も一目おくほどの人物であったとみられている⁽⁵⁾。また、文化的にも大陸との交流を深め、アルクイン (Alcuin, Alcuinus, 735-804) もチャールズ大帝の宮廷で活躍していたことが知られている。

ところが、アルフレッド王の祖父にあたるエグベルト王 (Ecgbert, 治世 802-839) がマーシャ国王ウィーラフ (Wiglaf) 王を破ったのを契機にブレトワルダの地位がウェセックス王国に移っていくのである。それゆえ『アルフレッド大王伝』が伝えるマーシャ王国は、その実力が急速に凋落していくという時代なのであった。実はこのことがデーン人 (ヴァイキング) の攻撃に拍車をかけた。他方、当時マーシャ王国の支配下にあった都市ロンドン (London, *Lundenwic*)⁽⁶⁾ も851年にヴァイキングの攻撃にさらされ、以前から姻戚関係によってウェセックス王国との絆を固めていた緊密な関係にもかかわらずブルグレッド王 (Brugred, Burhred 851-874)⁽⁸⁾ の時代にはマーシャ王国が次第にその力を失いつつあったということになる⁽⁹⁾。

(5) William Henry Stevenson, *Asser's Life of King Alfred*, (Oxford, 1959), 小田卓爾 訳『アルフレッド大王伝』(中公文庫, 1995) p.311, 略解・索引参照。

(6) 8世紀 (700年代) には、ノルウェーおよびデンマーク系ヴァイキングが河川沿いにブリテン島へ侵入し諸都市がその攻撃を受けた。ロンドンは842年および851年にいわゆる「大軍団」(the 'Great Army') の攻撃にさらされ、その先しばらく彼らの支配下に入った。871年の冬には大軍団がロンドンに拠点をおいている。Cf. Alfred P. Smyth, *King Alfred the Great* (Oxford U.P. 1995), pp.21-50, 57-59.

(7) ブルグレッド王 (Brugred) は852年にアルフレッド王の姉エゼルスウィスとウェセックス王国の領地であるチップナム (Chippanhamme) において結婚した。当時はマーシャ王国の勢いに衰退の兆しが見えはじめていたのである。

(8) マーシャ国王として即位した翌年 (= 853年)、彼はウェールズ人の攻勢に手をやいていた。そこでブルグレッド王の要請に応え、かつてマーシャ王国に属していたパークシャーの太守エゼルウルフ (Æthelwulf) は直ちにマーシャに遠征しブルグレッドと共にウェールズ人を鎮圧した。868年にブルグレッド王はヨークを陥落させたデーン人軍団の襲撃にさらされることになった。そのデーン人軍団の統率者はイーヴァル (Invar, Imhar, Inguar) である。A.P. Smyth, *op. cit.*, pp.55-65, 117-118., および彼の旧著, A.P. Smyth, *Scandinavian Kings in the British Isle 850 - 880* (Oxford U.P.) を参照。

(9) もっとも、このマーシャ王国では学問の火が消えることなく、アルフレッド王は少なくとも4人の学者をマーシャ王国から招聘している。太守 [ラテン語では *comites*, 古英語では *ealdorman*] エゼルレッドの活躍。アルフレッド王はマーシャ王国への配慮も忘れず、当地の修道院へ遺産を分与している。Cf. Asser's Life of King Alfred, 前掲・邦訳、第83節「アルフレッド王のロンドン再興」・第102節「資産の分与」、119、136-137頁を参照。

本稿の脚注 (7) に示すようにブルグレッド王は、そもそもウェールズ人の反抗さえ単独で防御できなかったのであるから、デーン人の軍団がマーシャに來襲した頃は統率者の一人イーヴァル (Inwar, Ivar beinlausi) と対決する実力は彼になかった。このため2年後の871年におけるデーン人軍団との戦闘の際には、長兄エゼルレッド王 (Æthelred) とその弟アルフレッド王がマーシャへの援軍に加わった。その時イーヴァルの姿はみられなかったが、代わりにグスルム (Guthrum) が加わっていたと思われる。しかしその戦闘に決着がつかず、結果としてアングロ・サクソン軍がレディング (Reading) の陣営も放棄するという条件を受け入れ、更に金銭の支払いを容認した。こうして軍団はその後ロンドンに滞留し、また873年の秋にはレプトン (Repton) へと闊歩し、マーシャ王国の各地を席卷したのである。

既述の様に、このレプトンは英国ミッドランズ地方でキリスト教が最初に導入された場所として知られている。それはノーサンブリア王国からの4人の僧侶がマーシャ王族のキリスト教改宗のため当地に派遣されたことに端を発した⁽¹⁰⁾。このために前述した通りレプトン (*Hreopandum, capital*) には早くからキリスト教が定着し、加えてマーシャ王国の支配者たちが拠点を構える場所となったのである。しかも、すでに7世紀末 (= 697年) ころにはレプトンに修道院が存在したとみられる。因みに当時の司教区制度について若干ふれておくと、イングランド東南部やミッドランド西部では11世紀頃まで司教区の境界が政治的勢力の境界線とほぼ一致していたようである。また、多くは小さな修道院の形式をとり貴族 (有力者) たちがそれを領有地に建て、自らの親族が主宰し、しかもその従属民たちがスタッフであるような「家つき修道院」となし、大部分が「教区教会」の役割をも併せもっていたといわれている。そしてこれらがミンスターと呼ばれ、他のものは王族の女子修道院長が主宰し、構造上は男女別々に分かれた二重修道院という形をなし、王立という形式であったとみなされている⁽¹¹⁾。

前述したようにダービシャー (Derbyshire) ではレプトン修道院が最初であるが、それはおそらく7世紀の St. David によって⁽¹²⁾か、マーシャ王国の王子フリドリウス (Fridurius) のいずれかによる創設とみなされる。加えて、アングロ・サクソン時代に創設の基盤をおく他の修道院と同様に、当初は男女双方にひらかれ、ここでは女子修道院長 (abbess) 最早期の一人はエルフスリス (Ælfthryth) によって統括されていたようである。この

(10) "A Brief History of Repton": from <http://www.Reptonvillage.org.uk/history> & H.M. Taylor, *St. Wystan's Church, Repton* (J.M. Tatler & Son Ltd, 1989), P.3.

(11) Malcolm Folkus & John Gillingham (eds.), *Historical Atlas of Britain* (Grisewood & Dempsey, 1981), 中村・森岡・石井訳『イギリス歴史地図』(東京書籍、昭和58年)、34頁。および Sarah Foot, *Monastic Life in Anglo-Saxon England, c.600 - 900* (Cambridge U.P. 2006), pp.347-348. この教会が当時ミンスターとして機能し、トレント川の南側のダービシャーのほぼ全域をカバーしており、後年の Domesday Book において "Repton wapentake" として扱われているという指摘は、この地域の特性を考える場合においても重要なことでないだろうか。David Roffe, "The origin of Derbyshire" *Derbyshire Archaeological Journal*, 106 (1986), pp.102-122.

(12) William Page (F.S.A) (ed.), *The Victoria History of the County of Derby, Vol.2* では *Giraldus Cambrensis* (Rolls Ser.), ii, 386.による。

人物に関しては多く知られていないが、その時期グスラック (Guthlac) なる人物がこの修道院に入会し剃髪を受け、死後に最初の聖人となった。さらにまた、8世紀になるとレプトンには霊廟 (crypt) がつくられ、そこがマーシャ王族によって使用されるようになっていたのである。しかも、ウィ - ラフ王 (Wiglaf) 統治下において王子ウイスタン (Wystan) がマーシャ王国の継承をめぐる争いで叔父に殺害され (849年)、王位にあった祖父 (Wiglaf) の霊廟に葬られたため教会にあった祭壇が高名になり、のちに聖人として扱われたウイスタンの名に置き換えられて⁽¹³⁾ 巡礼者が訪れる場所になったようである。既述のとおり、現在レプトンのこの教会が聖ウイスタン教会 (St. Wystan's church) とも呼ばれ、正面入り口にウイスタンの肖像が見られるのはこのためなのであろう (Fig.4 参照)。この教会にマーシャ王族の霊廟が設けられたことは前述の通り

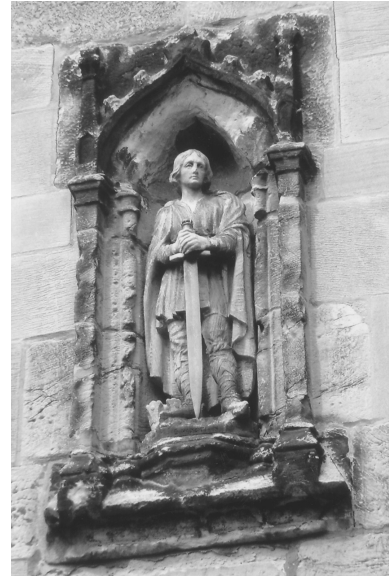


Fig.4 Stature of Wystan, above porch doorway (筆者撮影)

であるが、後年になって明らかになった構造的特徴として、そこへは現在の教会堂で床の一角にある地下への入り口によって通じている。(Fig.5 参照) このような改造は、マーシャ王国が最も隆盛を極めていた時期すなわちウイグラフ王の頃に着手され、彼らの遺骸とともに聖ウイスタンも安置されていたのであろう。⁽¹⁴⁾ 因みに、現在はこの教会を囲む一帯がレプトン・スクール (Repton School) と呼ばれる私立学校 (= grammar school) のキャンパス内に位置していて、教会に隣接した場所にあるかつての Old Priory が学校の事務統括本部を兼ねた図書館になっている。ヘンリー 8 世の時代における修道院解散のための財産没収の結果であろうが、同校や村の記録⁽¹⁵⁾ によると最初は 1539 年にトマス・タッカー (Thomas Thacker) なる人物がこの場所を入手した。この人物はトマス・クロムウェル

(13) D.W. Rollason, 'List of saints' resting-places in Anglo-Saxon England', *Anglo-Saxon England* 7 (1987), pp.79-82.; (in mansolio Wiglavii Regis avi sui), D.W. Rollason, *The Search for St Wigstan, Prince-Martyr of the Kingdom of Mercia*, Vaughan Paper 27, Department of Adult Education, Univ. of Leicester; ditto, 'The cults of murdered royal saints in Anglo-Saxon England', *Anglo-Saxon England* 11(1983), pp.5-9; A.T. Thacker, 'Kings, saints and monasteries in pre-Viking Mercia', *Midland History* 10 (1985), pp.12-14.

(14) Cf. H.M. Taylor, *St. Wystan's Church, Repton: A Guide and History* (Printed by J.M. Tatler & Son Ltd, reprinted 2002), p.19. なお、聖ウイスタンが埋葬されたのは 849 年であるが、その遺骸はクヌート王 (1016-35) の頃にイーヴシャム (Evesham) に移されたということになっている。しかし、この遺骸移送の時期そのものについていえば、レプトンにデーン人軍団が侵入する前に既に行われていた可能性もある。その理由は、早期の教会は修道院に付属していたのに、修道院そのものがデーン人軍団の侵入により占拠され存続・機能しえなくなっていたからである、という。Taylor, *op. cit.*, pp.19-20.

(15) *Repton Village History*, web site. によると、ギルバートは Mery Tudor 下における諸修道院再興の展望に警鐘をならし、当該修道院の大部分をとりこわしたのである。



Fig.5 entrance to the crypt
(筆者撮影)

(Thomas Cromwell) の執事であった人物である。その後子息であるギルバート (Gilbert) によって受け継がれ、次に所有したとみられるジョン・ポート卿 (Sir John Port) の遺言で 1559 年に同校が創設されたようである⁽¹⁶⁾。幸いなことに、筆者は前述の Tony Whittaker 氏の紹介により、その図書館内も拝見する機会に恵まれた。この地の遺跡から発掘された当時の出土品は、その大部分がダービー市の博物館

に移管されたが、同校には当時のヴァイキング兵士が用いた剣 (viking sword) などごく少数の出土品が発掘の記念として展示されている。

3 ヴァイキングのレプトン遺跡について

歴史記録としての『アングロ・サクソン年代記』では、アルフレッド大王とデーン人の首領グスルムによる「和平条約」に遡ること 16 年前の出来事として、グスルムの率いる軍団と合流したヴァイキングの大軍がノーサンブリア (Northumbria) のリンゼイ (Linsey) からトレント川を遡上してダービシャーのレプトンに陣営を構築し、そこで越冬したとある。念のため、『年代記』の叙述を記すと以下ようになる。即ち、[874.b Her for se here of Lindesse to Hreopendune and þær wintersetl nam, and þone cyning Burhred ofer sæ adræfdon ymb xxii wintra þæs þe he rice hæfde ; and þæt land eallgeodon. And he fór to Róme and þær gesæt,] (*An Anglo-Saxon Chronicle* from British Museum, Cotton MS., Tiberius B. IV, edited by E. Classen & F.E. Hamer, Manchester at The University Press, 1926, p.28), b : MS. DcclxxIIII.

現代英語訳では、[A & E, 873 (c874), in this year the host went from Linsey to Repton, and there took winter-quarters, and drove the king Burhred oversea twenty-two years after he succeeded to the kingdom ; and conquered the entire kingdom. And he went to Rome and there resided,となる。Cf. D.C. Douglass (ed.), *English Historical Document*, Vol.1, c.500 - 1042 (Eyre Methuen, 1979), p.194. ; *The Anglo-Saxon Chronicle*, translated by G.N. Garmonsway, (J.M. Dent & Sons Ltd, London, 1972), pp.72-73.

それゆえ、最近になってこのレプトン教会でのヴァイキング越冬を示唆する「遺跡」の本格的な発掘がおこなわれ、多くの証拠が発見されたことは、極めて重要なことであったとい

(16) A. Macdonald, *A short History of Repton* (1929), pp.79-90, & pp.166-96.

えるであろう。実は、この一帯に古い時代の遺跡が存在する可能性については古くから指摘されていたが、オックスフォード大学のマーチン・ビドル氏 (Martin Biddle) らを中心とした 1974 年以来 19 年間にも及ぶ本格的な発掘調査が実施され、いわゆる “Repton Vikings” の全貌が明らかになってくるのである。幸いにも、かつて筆者はロンドン大学 University College 中世考古学部門のグラハム・キャンベル氏 (James Graham-Campbell) が主催する研究会に参加し、その興味深い報告の一部を聞く機会を得ていた。ただし筆者が M. ビドル氏による発掘結果の報告に接することができたのは 1986 年 6 月のことであって、発掘作業はその後 7 年間も継続していたことになる。筆者が Repton を訪れて、自分の目でその痕跡を直接確かめてみたいと思いつけていたのはこのためなのであった。しかし、もちろん調査を終えた現在では発掘作業が実施された場所も完全に埋め戻されている。

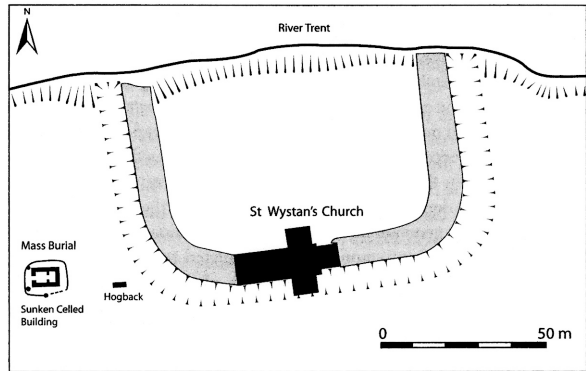


Fig.6 The Viking winter camp at Repton, 873-4, A reconstruction sketch [D.M. Hadley, *The Vikings in England- settlement, society and culture* (Manchester U.P., 2006), p.13.]

最初に彼の研究報告に接したときのメモ書きによると、主要な結果は以下の通りであった。即ち、 デーン人ヴァイキングがこの Repton に約 3.5 エーカー規模の要塞 (D-shaped fortress) を設け西暦 873-874 年にかけて越冬したことが検証されること (Fig.6 参照)、 しかも Trent 川 (= Old-Trent river) がそれ自体この要塞の一部を構成し、その中に既存の教会 (St. Wystan's church) が防御拠点として機能するように組み込まれていたこと。そして、 この要塞の内側にヴァイキング・シップの修繕を目的に設置されたドッグ (船梁) が川の土堤に切り込まれた形をとり、要塞 (防塁) の外側にあって今日の牧師館 (vicarage) 庭地に含まれる地点の盛り土 (= 石室) からは調査の結果デーン人軍団の「レプトン越冬」という歴史事実と直接結びつくように、少なく見積もっても 264 体の遺骨、鉄斧、大小のナイフ類、複数のコインそして金製の指輪などが発見された、ということなのであった (Fig.7)。因みに、上記の結果のうちで示したように水辺に面した空間に D 型の防塁を構築する事例については、ヴァイキング期デンマークにおいても存在する。即ちその小規模なものとしては都市オーフス (Århus) にみられ、大規模な事例としてヘデュー (= ハイタブ, Hedeby, Haithabu) などがある。⁽¹⁷⁾

(16) A. Macdonald, *A short History of Repton* (1929), pp.79-90, & pp.166-96.

(17) E. Roesdal, *The Vikings* (1991), pp.120-123, 128-130.; ヘデュー (ハイタブ) は、8 世紀前半ころから重要性をもったヴァイキング期北欧における第一級のヴィク (wic) 即ち交易拠点として機能し、当時の西欧諸市場との接点を有した都市集落である。『フランクの年代記』 (*Annales Regni Francorum*) にもスリエストルブ (Sliesthorp) として登場する。拙稿「ヴァイキング期デンマークにおけるヘデュー (Hedeby) の諸相」 (『東北学院大学論集』 経済学・第 90 号 (昭和 57 年 12 月) 所収、17-39 頁を参照。

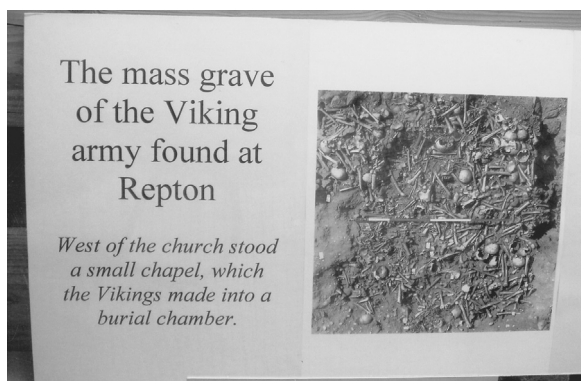


Fig.7 Display from the city of Derby Museum (筆者撮影)

同じく に関わることとして、遺跡から複数のコイン（貨幣）が出土したことは前述したが、それは5枚の銀貨ペニー（pennies）なのであり、そのうち4枚が西暦872年より以前に打刻されたものではないこと、そして5番目のものが873-4年に帰属するものと判定された。また、ヴァイキング剣のほかに鉄斧・銀製の丸型バンド・銅鍍箔を施したバックル、それに北欧の異教神を表す装飾品、銀鍍金トールのハン

マー（Thor's hammer）などが出土している⁽¹⁸⁾。

ところで、筆者がM. ビドル氏の発掘途中経過についての報告に接した時点では、ヴァイキングの「レプトン越冬」を裏付けるような遺骨の発見が総数で少なくとも264体をこえるということであって、それ以上の具体的内容が示されたわけではなかった。しかし、M. ビドル氏によると、その後ここで発見された人骨は1995年にユトレヒト大学 Van de Graaf 研究所で「放射性炭素年代測定法」（radiocarbon dating）によって精査され、性別・年齢等に関して以下のような興味ある事実が明らかにされた。それによると、第一に、発見された遺骨のうち概ね82%が成人男性（17歳 - 45歳）のものであるが、なかには「年代記」が示す873-4年以前と認められるものが一部含まれていたということなのである。当時はいわゆるDNA鑑定の手法が採用されてはいなかったとはいえ、さらに興味深い事実として18%がスカンジナビア人ではなく、むしろアングロ・サクソン系の女性のも⁽¹⁹⁾と判定されたのであり、明らかに子供と認められる遺骨も3%程度あった、ということなのである。

次に、こうした多数の遺骨が発見された埋葬場所（盛り土）では、その中心部に沈床（sunken celled）の石造玄室が別途設けられ、身分や地位の高い人物の遺骨が安置されていたことが発掘の際に明らかになった。この人物とは一体誰なのであろうか。加えて、遺骨の中にヴァイキングの「レプトン越冬」より年代が古いものが一部混在し、しかもアングロ・サクソン系の女性や子供の遺骨までが同時に発見されたとなると、これをいかに解釈すべきなのかということがいま一つ残された問題となる。以下、これらの点などを含めていささか整理・解釈を試みて小稿の結びとしたい。

(18) Martin Biddle & Birth Kjølbye-Biddle, "Repton and the 'great heathen army', 873-4, James Graham-Campbell, Richard Hall, Judith Jesch and David N. Parsons (eds.), *Vikings and the Danelaw* (Oxbow Books, 2001), pp.63-68.

(19) Cf. *ibid.*, pp.74-78.

4 結びにかえて

前節で指摘した問題が生じた理由の一つは、そもそも M. ビドル氏らによる本格的な調査が開始されるずっと以前に、実はその盛り土（埋葬場所）がたまたま開けられてしまっていた、という過去の経緯があったことによるのである。当該場所に古い時代の遺跡が存在した可能性のあることが以前から知られていたと前節でも述べておいたが、最初この盛り土部分は 17 世紀後半（c.1686）頃トマス・ウォーカー（Thomas Walker）なる人物によってあけられ、当時ダービー市で古物に詳しい Dr. Simon Degge 氏に問い合わせがなされていた。この時点でも中心部には石棺が存在し、その方向に足を向けた形で 100 以上の遺骸があったと報告されている。また、18 世紀（1787 年）に入り当時の土地の所有者（George Gilbert）があけたときには、石棺の底部は残存していたものの人骨は恰もかき集められたような形で積み上げられていたのだ⁽²⁰⁾という。近年になって、ここを J. C. Cox なる古物蒐集家が興味本位で再度掘り返すなどといった経緯も加わり、学術的な見地からの発掘調査が本格的に行われるようになったのは、ようやく 1974 年になってからなのであった。

おそらく、このように複雑な事情があったため前述のような状況がもたらされ、その解釈をいささか困難ならしめる事情にいたったことは間違いない。そこで、前述したように 873-4 年より以前の人骨が含まれていたとすると『年代記』に示される「ヴァイキング越冬」の歴史的記述と異なることになるので、先ずこの点を考えてみよう。そのことに関して言えば、そもそもヴァイキングの兵士たちには、遠征の途上に死亡した者の遺骸を仲間内で相当長い間一緒に運んで移動していたということが知られてはいる。例えば Thorstein Ericsson なる人物は、その兄弟の遺体を連れ戻して埋葬するために、グリーンランドからヴィンランドへと船を出した⁽²¹⁾ということも指摘されているわけである。

これらをふまえると、レプトンの埋葬場所に葬られたものの中に『年代記』が記録する「レプトン越冬」の時期より前の者たちが後になって一緒に葬られた可能性がある、ということ推測することは、あながち誤りではないだろう。

しかしそれ以上に重要であるのは、埋葬場所である盛り土の中心にすえられた石室に埋葬されていた人物とは一体誰なのか、ということである。同じくそのことと一緒に扱われねばならないのは、ここで発見されたアングロ・サクソン系の女性や子供のものともみなされる者たちの人骨のことである。考えられることの第一は、そもそも前節で述べたようなレプトンの「霊廟」が構築される以前のこととして、マーシャ王族で高位にあった人物のために既に石室が設けられ盛り土を伴って埋葬されていたのではないか、ということである。そして後にレプトンを占拠し、このようなマーシャ王族の埋葬慣習に同化したデー

⁽²⁰⁾ R. Bigby, *Historical and Topographical Description of Repton* (1845), pp.401-2 & note 243: by way of, Martin Biddle & Birthe Kjølbye-Biddle, *op.cit.*, pp.67-8.

⁽²¹⁾ K.J. Krogh, *Viking Greenland* (Copenhagen, 1967), p.37.

人らの骨が一緒に残された、という推論も成り立たないわけでない。しかしそれではここから出土した北欧系異教神をあらゆる副葬品の内容に説明がつかないであろう。副葬品の内容については前節で述べたとおりだが、それをふまえると中心部の埋葬された人物は明らかに重要な人物に相違ない。しかも、そこに女性や子供と一緒に含まれていたのは人間がもし「生け贄」(human sacrifice) のためにであったとすれば、この中心部の石棺に埋葬されていた重要人物は異教徒に他ならなかった、ということになる。

ところで、この石棺の被葬者に関しては、発掘の指揮をとった M. ビドル氏が興味ある指摘を行っている。それは、「レプトン越冬」に関わる 4 人の主要な人物 (Healfdene, Guthrum, Osetel, Amwend) に加え、石棺から見つかった鋳貨の製造年代 (873-4) から判断し、第 5 番目の人物としてラグナー・ロスブロク (Ragner Lothbrok) の息子達の一人であったといわれる人物イーヴァル (Inwar, Ivar beinlausi) が考えられる⁽²²⁾、ということである。因みに、このイーヴァルは上述のロスブロク (Lothbrok) の息子でハールヴダン (Healfdene, Healfdene, Halfdene) と兄弟関係をなす人物なのである。865 年に東アンゴリアに到来したヴァイキングの「大軍団」は、ハールヴダンとイーヴァルが率いていたと言われている。この軍団はイーヴァルの指揮のもとで、866 年から 869 年にかけてヨークを襲い、オズベルフト (Osbyrht, 849-863) とアエルラ (Ælla, 862-867) の同盟をものともせず、ヨークを占領する。その間にノッティンガムを襲撃して前述のマーシャ王ブルグレッドを脅かしている。そして彼らは、リンカーンからセットフォードへと南下し、翌 870 年にはエドマンド王 (Edmand, 855-870) を惨殺⁽²³⁾している。このように、彼らは東アンゴリア王国、マーシャ王国そしてノーサンブリア王国をも席卷したのである。その結果、東アンゴリア王国は崩壊し、二つの王国も当時崩壊寸前に追い込まれた。この段階までイーヴァルは軍団の統率に加わっていたが、彼はその後アイルランド方面に遠征している。とすると、そのイーヴァルが一体なぜこのレプトンの被葬者でありうるというのだろうか。

そもそもウェセックスが中心に編纂されている年代記にはイーヴァルの名前があまり登場しない。『アルフレッド大王伝』の中でも彼がハールヴダンの兄弟として一度だけ登場する (第 54 節) 程度である。しかしこの問題に関して、かつてスマイス氏 (A. P. Smyth) が『ラグナル・ロスブロクのサガ』(Ragnar Lothbrok's saga) や『アングロ・サクソン年代記』などの史料を駆使してイーヴァルの現実的な行程を描き出すことに成功していたのであった。即ちスマイス氏は後者の『年代記』で 865 年に記録されサネット島に上陸し

(22) Cf. Martin Biddle & Birthe Kjølbjæ-Biddle, *op. cit.*, p.82ff.

(23) ノーサンブリア国王 (治世 849-862 年)。アエルラを正統とみなさない場合は、在位は 867 年までとなる。彼は、862 年に王家の出でないアエルラに追放されている。しかし、867 年 3 月にヴァイキングの侵入を直視して同盟を結びヨーク奪還のために戦うが、奮戦もむなしく二人は戦死した。Cf. *Asser's Life of King Alfred*, 前掲邦訳、第 27 節を参照。

(24) エドマンドは東アンゴリア国王 (857-870) であるが、デーン人の軍団は東アンゴリア王国に戻り、イーヴァルが服従を迫った。しかし敬虔なエドマンド王は異教徒の脅迫による服従を潔とせず降伏を拒絶したため捕えられ惨殺された。殉教者にして聖者。

ケントを席卷した「異教徒の軍団」と翌年東アングリア地帯に上陸して越冬した「大軍団」は別個のものではないとした上で、他方イーヴァルは既に863年かその翌年の春にアイルランドを出発し、アエルラに苦戦する兄弟を尻目に狡知にたけた彼（＝イーヴァル）が友好を装ってアエルラに接近し巧みに伏線を張っていたこと、そしてそこへ東アングリアからの軍団が「合流」したのだ⁽²⁵⁾、と見たのである。このように考えれば伝説や史



Fig.8 Display from the city of Derby Museum (筆者撮影)

料的記述を満足させられることになる。東アングリア崩壊後はイングランドにおけるデーン人「大軍団」と対峙する舞台がウェセックス王国へと移り、その指導者がハールヴダンと周知のグスルム (Guthrum) になる、というわけである。発掘の任にあった M. ビドル氏らも、A. P. スミス氏と同じように考えている。それは、このことがアイルランドの『アルスター年代記』(Annals of Ireland) の872年の記録⁽²⁶⁾でも確認されるからであり、また『ラグナー・ロスブロックのサガ』(Ragnar Lothbrok's saga) においてもイーヴァルがイングランドで死亡したのだ、と述べられている⁽²⁷⁾。ただしイーヴァルは Ivar bainlausi (beinlauss) とも呼ばれ、その渾名が“骨なし” (“boneless”) であったとすると、発見された石棺の被葬者が相当に長身の人物と見られることと矛盾しないわけではない (Fig.8)。しかしそれにもかかわらず、イーヴァルによって侵略されたアイルランド側の年代記録がやはり有力な決め手になるのであろう。ともあれ、レプトンにおけるこの埋葬墓は865年から870年にかけて存在した軍団によって造営されて当地でイーヴァルが埋葬され、その後は主たる指導者ハールヴダンの関心事がイングランドの北方に、他方グスルムとその仲間たちの場合は南方へ指向することになったと思われる。

以上、本稿ではレプトン・ヴァイキングの遺跡に関する考察をしてきたが、最後に次のことを付け加えておきたい。それはこのような史実が展開された時代を遡り、概ね5世紀後半から8世紀初頭にかけてラインランド、南スカンジナビアそして北方スイスなどの諸地域では極めて贅沢な埋葬墳墓が造営されているのである。イングランドの場合、サフォークシャーのサトン・フー⁽²⁸⁾ (Sutton Hoo) やバッキンガムシャーのタップロウ (Taplow) な

(25) A.P. Smyth, *Scandinavian Kings in the British Isles 850-880* (Oxford U.P., 1977)

(26) John O'Donovan, *Annals of the Kingdom of Ireland* (AMS Press, 1966), vol.1, p.519.

(27) Schlauch M.(trans.), *The Saga of the Volsungs, the Saga of Ragnar Lodbrok, together with the Lay of the Kraka*, 2nd edn. (1949), pp.251-252. “Ragnar Lothbrok's saga has the most detailed account. According to this, Ivar, as he lay dying, ordered that, if this was done, foes coming to the land would meet ill-success.” cf. Martin Biddle & Birthe Kjøbye-Biddle, *op. cit.*, pp.82-83.

(28) これに関しては拙稿「研究ノート、船葬墳墓地サトン・フーをめぐる小論」(『ヨーロッパ文化史研究』東北学院大学大学院文学研究科・ヨーロッパ文化史専攻、第7号、2006年3月所収) 147-159頁を参照。

⁽²⁹⁾ だがそれにあたり、際立った規模と出土したすぐれた副葬品からみて異教時代にあつて地方的有力者をしのぐ人物のために造営されたものの典型的事例をなしている。しかし重要なのは、これらを含む埋葬墳墓が造営された時期とその分布の在り方である。つまりこうした埋葬墳墓は、その分布上当時のキリスト教化されたフランク族定住地域のいわば「外辺」に出現していたと看做すことができ、従つてそうした既存の状況が王族もしくは貴族的有力者によるキリスト教受容、およびその埋葬地の登場をやがて容易に可能ならしめた⁽³⁰⁾と考へたい。このような視点でみると、例えば前述のサトン・フー船葬墳墓からほぼ1世紀あとに、隣接するマーシャ王国で後継者と目される人物がイングランドで最初のキリスト教ミンスターをトレント川沿いのレプトンに、しかも石造建築の形で造営できたことにはしかるべき理由があつたということになるであろう。本稿ではこれまでいささか考察をしてきた当該地におけるヴァイキング軍団の越冬拠点構築を、その後におけるウェスト・サクソン王国との抗争および「デーンロウ地帯」(Danelaw)の存在をめぐる問題を考える場合の史実の一つとして把握し、位置づけておきたい。因みに筆者にはこれを補強する次の証拠として、当地レプトンの近傍で発見されたデーン人系ヴァイキングによる第2次植民的定住を示すby地名の場所イングレビー (Ingleby) 遺跡に関する他の研究材料が手元にある。それもまた前述のトニー (Tony Wittaker) 氏の案内で直接訪れる機会に得たものであるが、それについての考察は次の研究課題として残したい。

⁽²⁹⁾ Taplaw の埋葬墳墓は、おそらく Tæppa と呼ばれた首領のために造営され、Sutton Hoo が発見される以前のイングランドにおける最も豪華な墳墓なのである。Cf. Audrey Meaney, *Gazetteer of Early Anglo-Saxon Burial Sites* (George Allen & Unwin, 1964), p.59. ; D.M. Wilson, *The Anglo-Saxons* (Frederik A. Praeger, 1962), p.46, 103, 137, 219.

⁽³⁰⁾ Cf. John Blair, *The Church in Anglo-Saxon Society* (Oxford U.P., 2005), p.53.